□作品紹介□

―賛助作品―



『玉磨かざれば光無し。』（實語教）
（人学問せざれば智能を開発し得ざるに譬う。）
「玉不磨無光」
思い切り感情が伝わるように仕上げました。



『萌』
「萌」
季節や感情全てに「萌える」ことを願って・・・・。

□作品紹介□

―西来院―

一、浅野彰浩

創作　楷書　『厥の猷を踐み脩む』

「踐脩厥猷」

余白が適度にある方が文字一つ一つを見やすいので半切に四文字だけ。造像記風に豪快さを表現しつつ、慎重にゆっくりと書くので結構時間がかかった。「その道を踏み修む。」儒教の尚書「微子之命」の一節。母校である福岡県立修猷館高校の由来。創作を書くにあたって題材・出典に困った挙句にたどり着いた四文字。

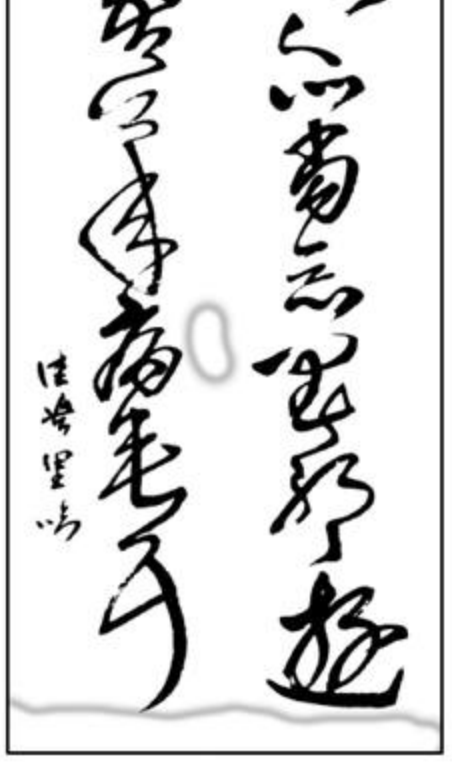


二、東　佳央里

臨書　草書　王鐸『臨古帖』

「足下既有意適間閑曠。亦當忘暑耶。遊矚疎數慰對(者。卿少)吾今年病垂耳(了)。」

王鐸の草書は何度も書いているのですが、いまだに苦戦しています。今回は初めて半切サイズの草書に挑戦しました。王鐸も実際に半切ほどの紙に書いた珍しい作品です。時間がなく全然書き込めなかったので半切という小さい紙におさめることを重視しました。未熟すぎる作品ではありますが御批評よろしくお願いいたします。



三、井上莉穂

臨書　仮名　伝小大君筆　『香紙切』　半切

「春のは（者）じめ（免）こ（古）ろ（路）よしのぶ　はるか（可）ぜのふくとき（支）が（可）た（多）のこほ（本）り（利）うすみ（見）そ（所）でのたもとをけさやとく覧中つか（可）さゆ（遊）くみ（見）ち（遅）も（毛）春け（介）き（支）も（毛）のを（越）ほ（本）とゞぎすこゑに（尓）こゝろ（路）のとま（万）り（利）ぬるか（可）な（奈）む（无）らか（可）み（見）の御と（東）きのうた（多）あはれ（八）せ（世）よみ（見）人しらず　あふことをいつか（可）とまつに（尓）あやめ（免）ぐさいとゞこひ（日）ぢに（尓）しげ（希）る（流）か（可）な（奈）

もとすけ（介）　ふ（布）ぢの花こき（支）（无）らさ（佐）き（支）のいろ（路）より（利）もお（於）し（四）むこゝろ（路）をたれか（可）そ（曽）め（免）け（希）む　山ざとのか（可）き（支）ね（年）の花に（尓）うぐひす（春）のなくを（越）き（支）ゝて春宮に（尓）た（多）てま（万）つる　なほ（本）た（多）ゞ…」

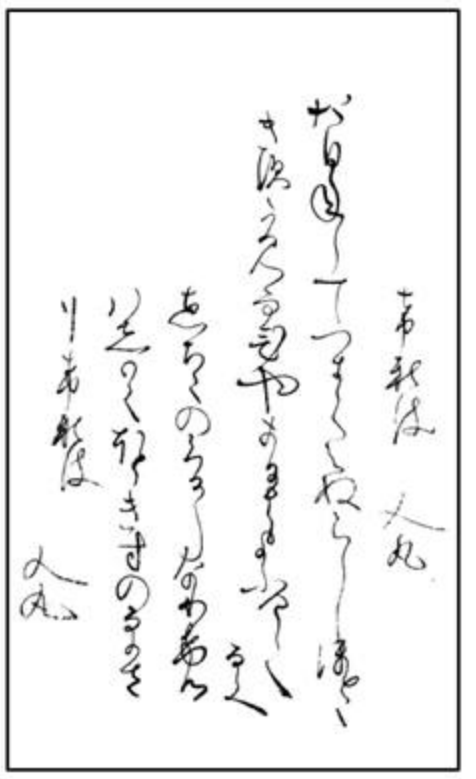
上品さの中に大胆な鋭い線質にひかれてこの作品を選びました。その細い線の中にも大胆さ、自由奔放さを表現し、作品の中に立体感がみえていたら嬉しいです。

四、内村実穂

臨書　仮名　『香紙切』　半切

「け（希）れ（礼）ば人丸…」

香紙切にはまりました。仮名を書くことが好きで好きで仕方がありませんでしたが、今はこの香紙切を書くことがもう楽しくて楽しくてなりません。優雅な軽やかさとキレ、そして思い切りの良さという香紙切の魅力にすっかり魅せられてしまいました。飽きることはしばらくなさそうです。



※写真は一部抜粋

五、大庭諒介

臨書　行書　米芾『虹縣詩巻』　全紙横

「碧榆緑柳舊游中　華髪蒼顔未退翁　天使殘」

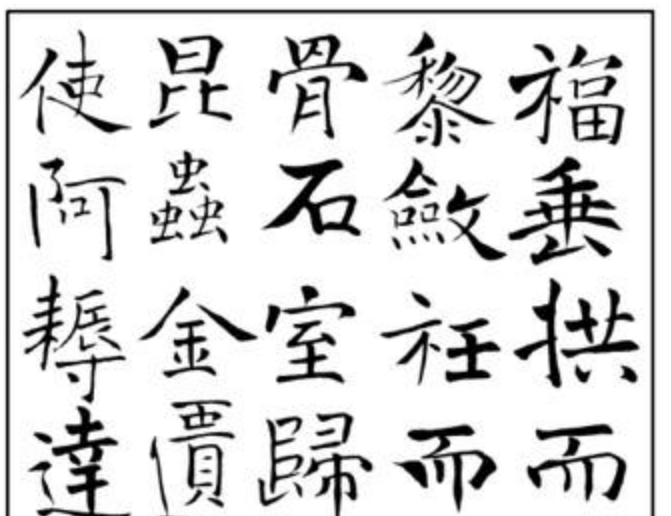
最初に言葉が生まれ、それを紙面に表現する。各々の字形によって行は揺れ、また字形は変化していく。書作品はそんな文字の関連性から成り立っている。米芾の力量に圧倒されつつ、今回は形臨に徹した。



六、植島寛之

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　全紙

褚遂良は初唐の三大家の一人で、他二人に比べ情緒的という点では圧倒的に秀でています。そこで、あえて原本よりも更に情緒的になるように強弱の差をつけてみました。まだまだ至らない点もありますが、これはこれで深みのある作品になったのではないでしょうか。



七、佐藤綾美

臨書　行書　米芾『苕溪詩巻』　半切

「旅食縁交駐浮家爲興来句留荊水話襟向下峯開過剡如尋戴遊梁定賦枚漁歌堪盡處又有魯公陪」

前回の書展の頃から、米芾の字がとても好きになりました。半切3行のため1字が小さく、その中で米芾らしさをいかに出すかが課題でした。しかし以前より楽しく書けたと思います。ご批評よろしくお願いします。



八、柴田翔

臨書　仮名　松尾芭蕉『奥の細道』　半切

「月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也　舟の上に生涯をうかへ馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす　…」

『奥の細道』の有名な冒頭部分を、芭蕉が抱いた旅への憧憬に想いを馳せつつ、臨書してみました。半切に細字仮名八行という型破りな形式も然ることながら、それに自身初挑戦の墨絵を添えてみるという向こう見ずな試みに至ったのは、まだ見ぬ地へ足を踏み出した芭蕉の果敢さに触発されたためかも知れません。新境地への一里塚として書き始めたこの作品。果たして今後、いかなる旅路を辿ることになるのやら…。是非ご感想をお聞かせ下さい。



十、武井友里恵

臨書　行書　趙孟頫『塵事帖』　半切

「塵事中。不得以時上状。惟極馳嚮。漸熱。伏計道體安」

趙孟頫のキリリとした雰囲気がかっこ良いなと思い、今回挑戦しました。自分の未熟さゆえにこの作品のかっこよさを皆さんに十分に伝えられないのが残念ですが、少しでも感じてもらえれば嬉しいです。この作品をとおして、昨年の秋季書展のときの自分よりも成長できたらいいと思います。



九、鈴木遼

臨書　篆書　呉熙載『篆書崔子玉座右銘四屏』　半切四幅

「崔子玉座右銘…」

字形の面白さに惹かれて篆書に挑戦しました。全て書き上げるのにとても時間がかかるので大変でした。でも、普段使う文字と全く違う文字を書くのは新鮮でけっこう楽しかったです。未熟な作品ですがご批評よろしくお願いします。

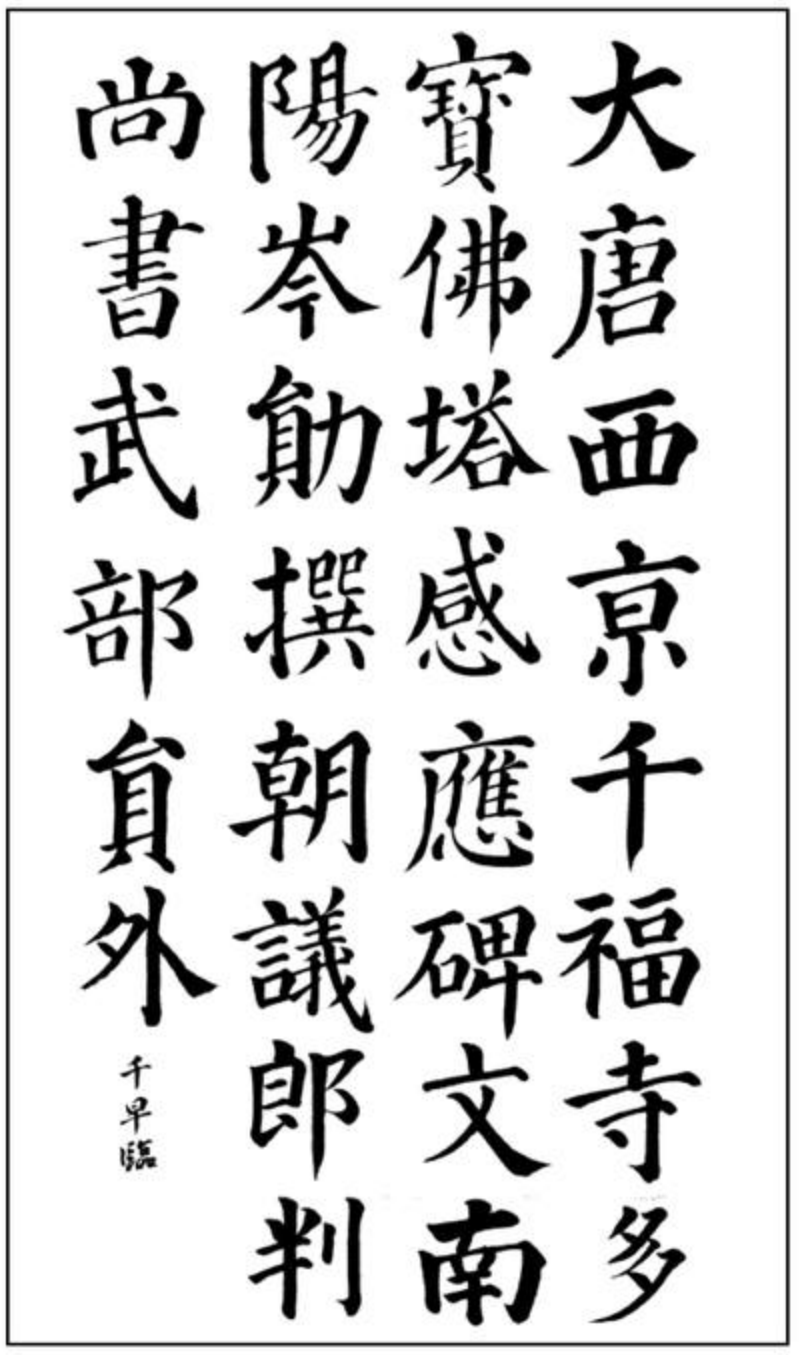


十一、多門千早

臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　全紙

「大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑文・・・」

力強くどっしりとした字体に魅了され臨書することを決めました。書いてみると最初に抱いた力強い印象とは別に細く繊細な線も持ち合わせていることにも気づき、非常に奥が深かったです。顔真卿独特の線質を表現できるように努力しました。作品を通して顔真卿を好きになる人が増えてくれたら嬉しいです。



十二、寺西幸

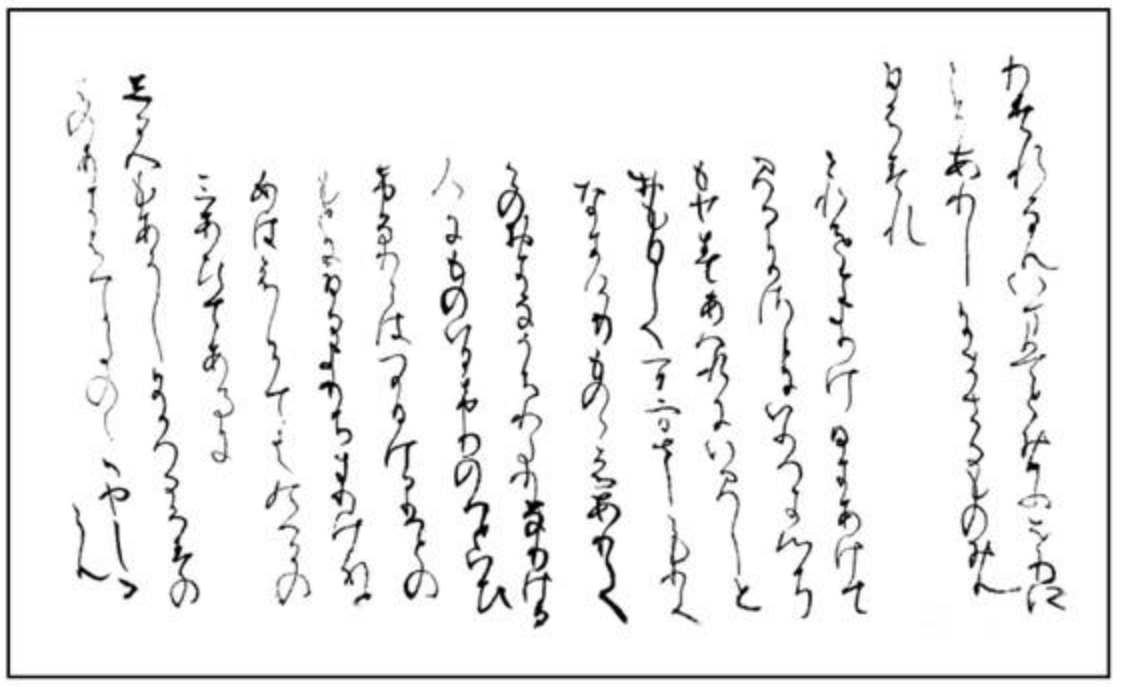
臨書　草書　傅山『真行草雑書冊』　半切

「豈別無能書者耶。能書而無名。古來衆矣。不必輒作柳書也。」

生まれてはじめて大きな作品に挑戦しました。後半の、書き出したら筆がとまらない感じに魅かれて挑んだのですが、この作品に漂う雰囲気を出すことが難しく苦労しました。

ご批評よろしくお願いします。



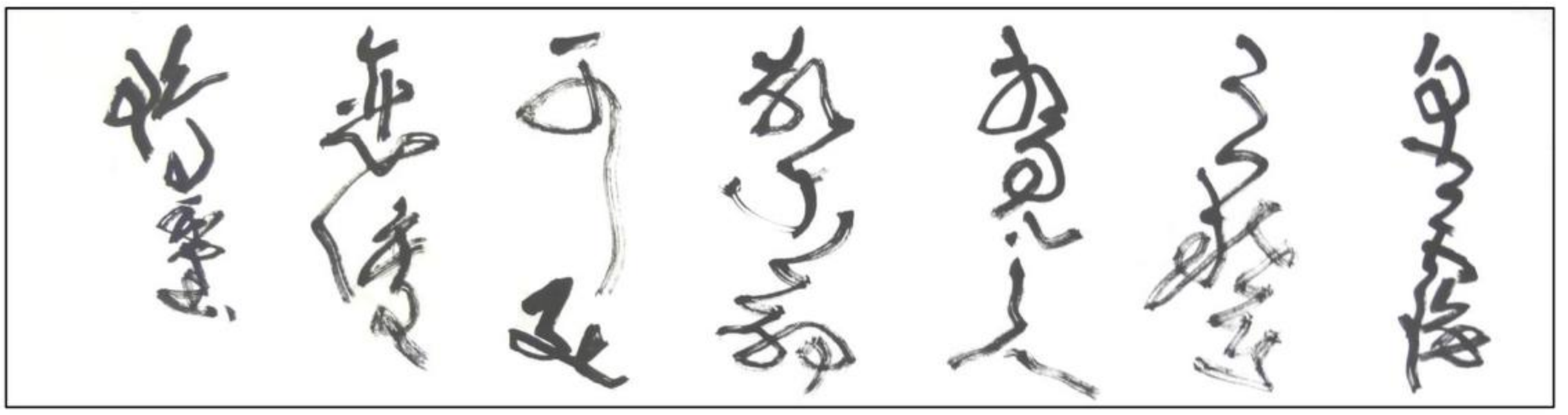


十三、時藤大典

臨書　かな　伝西行　『一条摂政集』　巻子

「わすれなむいまはとおもふをりにこそありしにまさるものおもひはすれ…」

また西行さんですが、今回は「面の構成」を勉強したくて一条摂政集のこの部分を選びました。一文字での変化、文字塊での変化、行の変化、そして面の変化と、意識すべき点が多く、それらを統制するリズムに悩み、勉強不足を痛感しました。



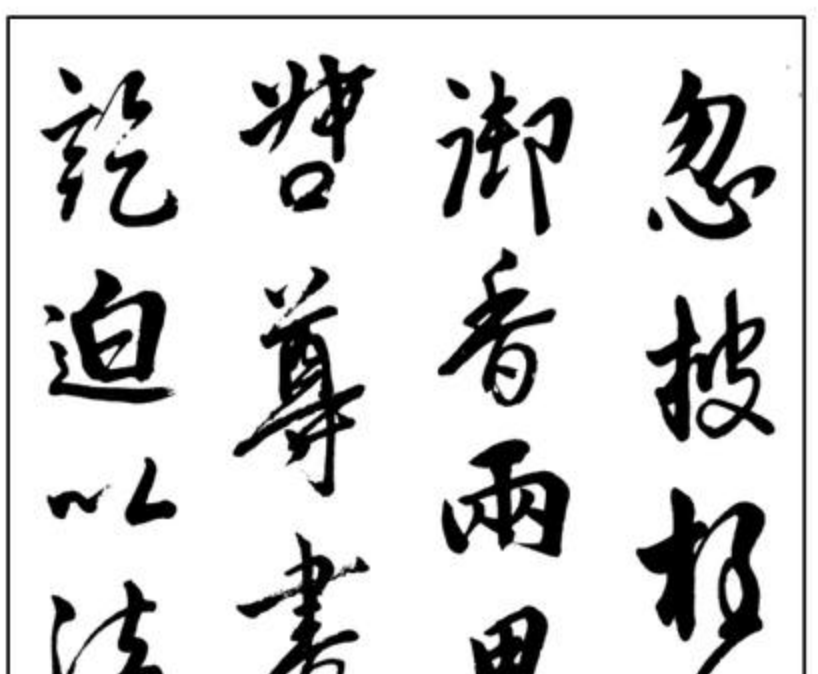
十四、中川和也
創作　複合書体（行草・仮名）
『朝霧』　半切横
「朝霧之欝相見之人故尓命可死恋
渡鴨（あさぎりの　ほのにあいみし
ひとゆえに　いのちしぬべく　こひ
わたるかも）」

十五、永溝聡士
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　半切
「尺璧非寶寸陰是競資父事君曰嚴與敬
こういうのをさらっと書けるようになりたいですね。

味わえば味わうほど、味わいが
増していくような作品を目指しま
した。大学生らしい“ハツラツと
した”、“若々しい”作品について
は、今回はもう後輩たちに任せて
（笑）、僕は、大学生ではありなが
らも、そこに甘えず、書の高みを
目指した《本格》の作品を一度は
創り上げたいものだと思っていま
す。老練にいたるにはまだまだ時
間がかかるでしょうが。

孝當竭力忠則盡命臨深履薄夙興温清似蘭」

十六、仁位元信
臨書　行書　空海『忽披帖』　全紙
「忽披枉書忽披枉書已銷陶尓御香兩裏及左衛士督尊書状並謹領訖迫以法緣暫
三年目で初めて半切以上の大きさの作品に挑戦しました。空海の忽披帖です。こ
の作品は空海が最澄、もしくは藤原冬嗣に宛てた手紙といわれています。手紙が作
品になるなんて空海さんすんごいですね。いわゆる『風信帖』の二通目ですが、『風
信帖』『忽恵帖』とは違った力強さが表現できていれば何よりです。



十七、平野泰隆

臨書　楷書　『元顕儁墓誌銘』　半切

「雲門靈鳳之美固以瓊峯秘壑無津龍條紫引錦於竹帛景穆皇帝」

整っていながら力強い字に魅力を感じて書きました。以前の作品で膨張しがちだった自分の字をできるだけ引き締めて、力強さと美しさを表現できるように頑張りました。ご批評のほどよろしくお願いします。

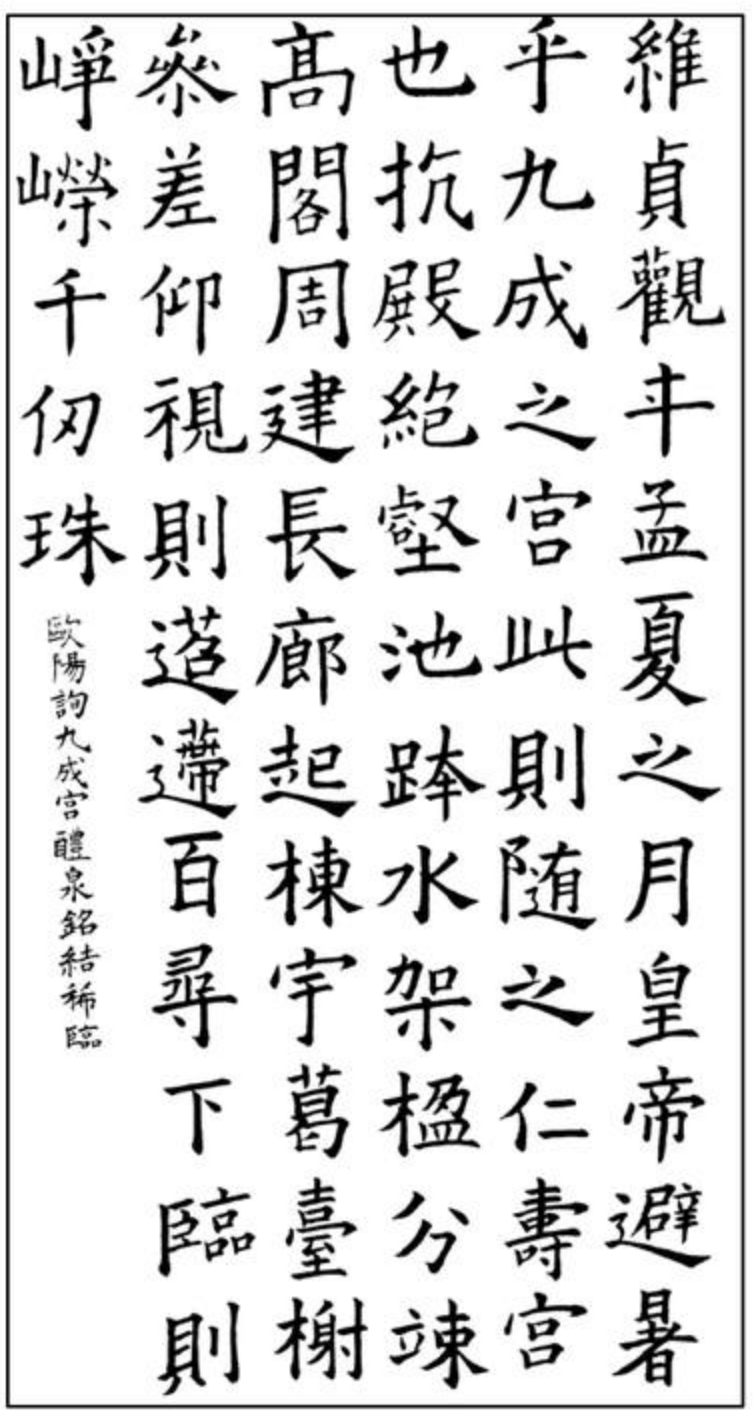


十八、藤井結稀

臨書　楷書　歐陽詢『九成宮醴泉銘』　全紙

「維貞觀年孟夏之月皇帝避暑乎九成之宮此則隨之仁壽宮也冠山抗殿絶壑池跨水架楹分竦高閣周建長廊起棟宇葛臺榭參差仰視則迢遞百尋下臨則崢嶸千仞珠」

初めて楷書の多字数に挑戦しました。精神力が最後まで持たなくて、何度も途中で心が折れそうになりました。すっきりと涼しげな九成宮の美しさが表現できていればと思います。



十九、真殿知佳

臨書　行草　張瑞図『感遼事作六首巻』　全紙 1/2

「雲氣戰士空歸夜月魂聞説溢」

キリッとした雰囲気の作品を目指して頑張りました。初めて半切以外の大きさに挑戦したので、書いていて楽しかったです。



二十、水谷慈

創作　草書　『至福』

「弄琴明月酌酒和風」

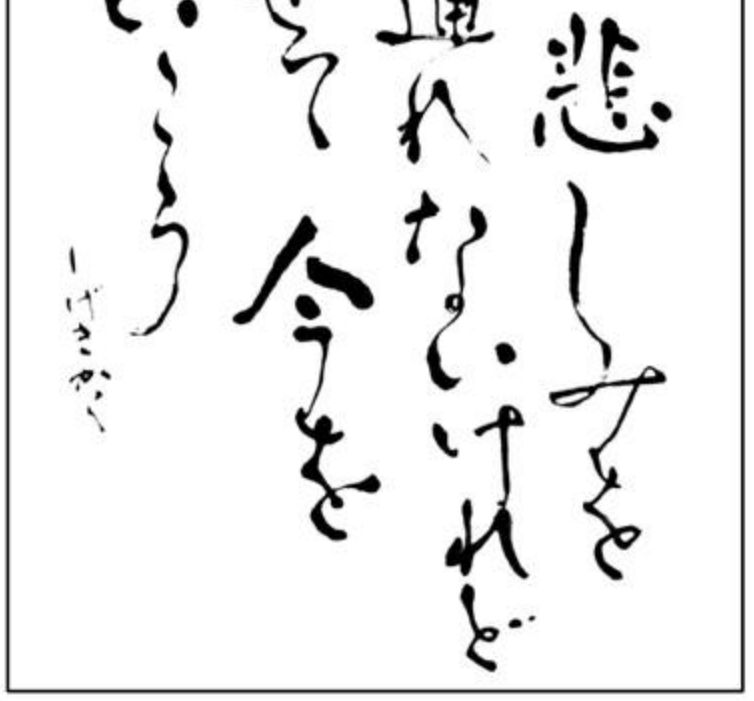
景色が綺麗でゆったりお酒が飲めたら至福。という気持ちを込めました。半切に一行というのはずっとやってみたかったので、楽しく書くことができました。



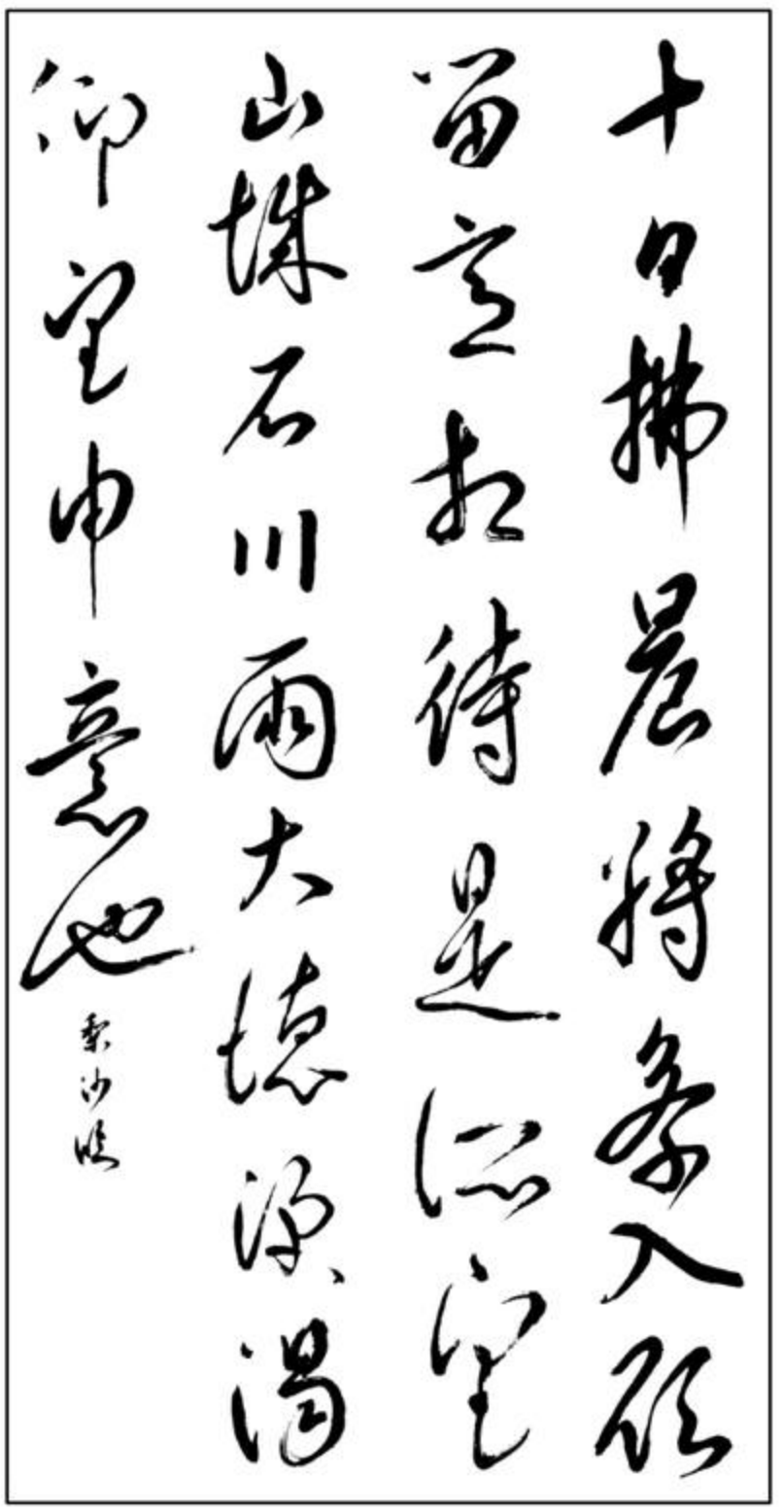
二十一、村田真名美
臨書　行書　黄庭堅『苦笋賦』　半切
「故能深雨露…」
今回は法帖とその中の作品にする部分を選ぶのにすごく迷いましたが、かっこいい字体に惹かれて選びました。また構成に関してはたくさんの方にアドバイスしていただきました。独特の雰囲気と鋭さを出せていたらと思います。



二十二、横山成基
創作　調和体　『手紙』　全紙
「いつの時代も悲しみを避けては通れないけれど
笑顔を見せて今を生きていこう」
アンジェラ・アキさんの『手紙～拝啓 十五の君へ～』を書きました。全体的に素敵な歌詞で、どの部分を書くか、すごく悩みましたが、「生きていれば苦しいこともたくさんあるけれど、逃げずに頑張っていこう」という前向きなメッセージを今の自分に贈りたいと思い、選びました。



二十三、吉田梨沙
臨書　行草　空海『忽恵帖』　全紙
「十日拂晨將參入願・・・」
きっと去年の秋季の反動です。最後の四文字が書きたくてこれを選びました。のびのび書くのが楽しいです。



□作品紹介□

―西来院　二尺×八尺―

二十四、糸井健太

創作　行書　『伝朱熹　四時読書樂　春』　二尺×六尺

「山光照檻水繞廊　舞雩歸詠春風香」

毎度の如く慢性的な臨書不足のまま勢いに走った酸欠作品ですが、春の清閑さと溢れ出る生命力を企図して書きました。



二十五、大庭諒介

創作　行書　『従軍行』　二尺×八尺

「風前墳畫角　雲上舞飛梯　雁塞秋聲遠　龍沙雲路迷」

漢詩は張正見『従軍行』より抜粋、字形は呉昌碩から集字した。起筆の〈潤い〉と、線の〈渇き〉を対比させ、また互いに相乗するような作品構成を行った。

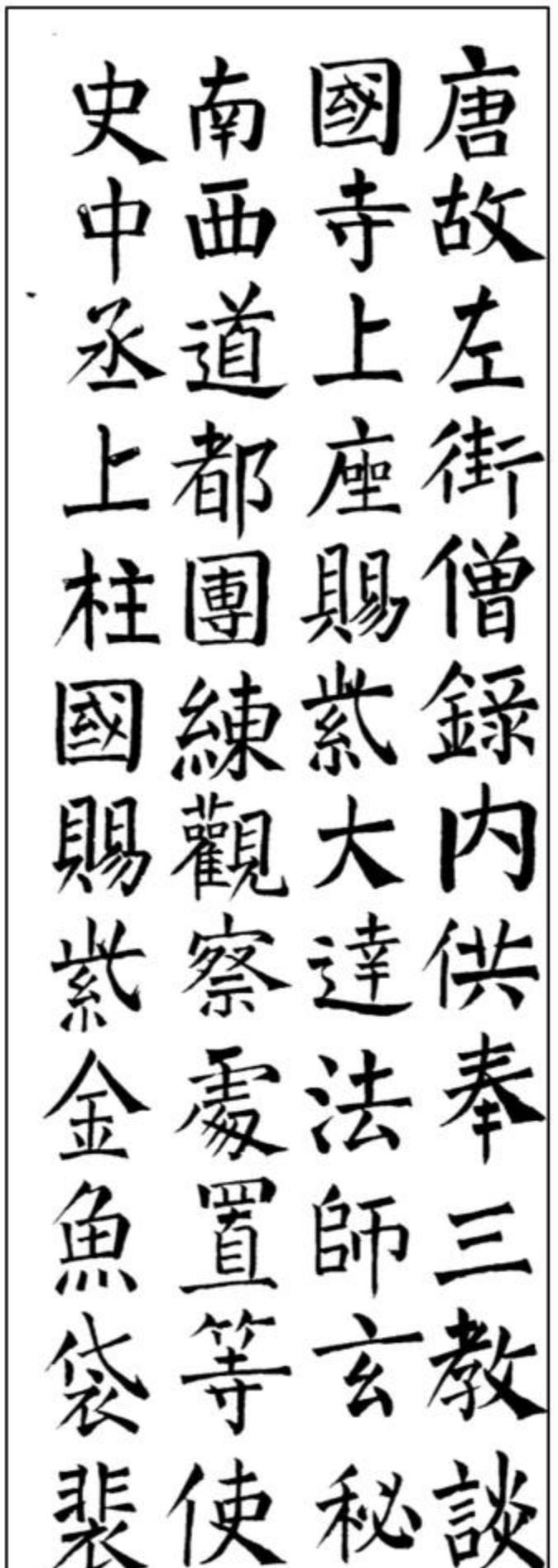


二十六、奥山優

臨書　楷書　柳公権『玄秘塔碑』　二尺×八尺

「唐故左街僧録内供奉三教談論引駕大徳安国寺上座賜紫大達法師玄秘塔碑銘并序江南西道都團練観察處置等使朝散文大夫兼御史中丞上柱國賜紫金魚袋裴休撰正」

二×八の楷書に初めて挑戦しました。右払いや筆の運びに特徴があったので、できるだけ再現できるように気を付けて書きました。また、整然と並ぶように縦横の列を揃えることを意識しました。まだまだ未熟な作品ではありますが、ご批評の程よろしくお願いします。

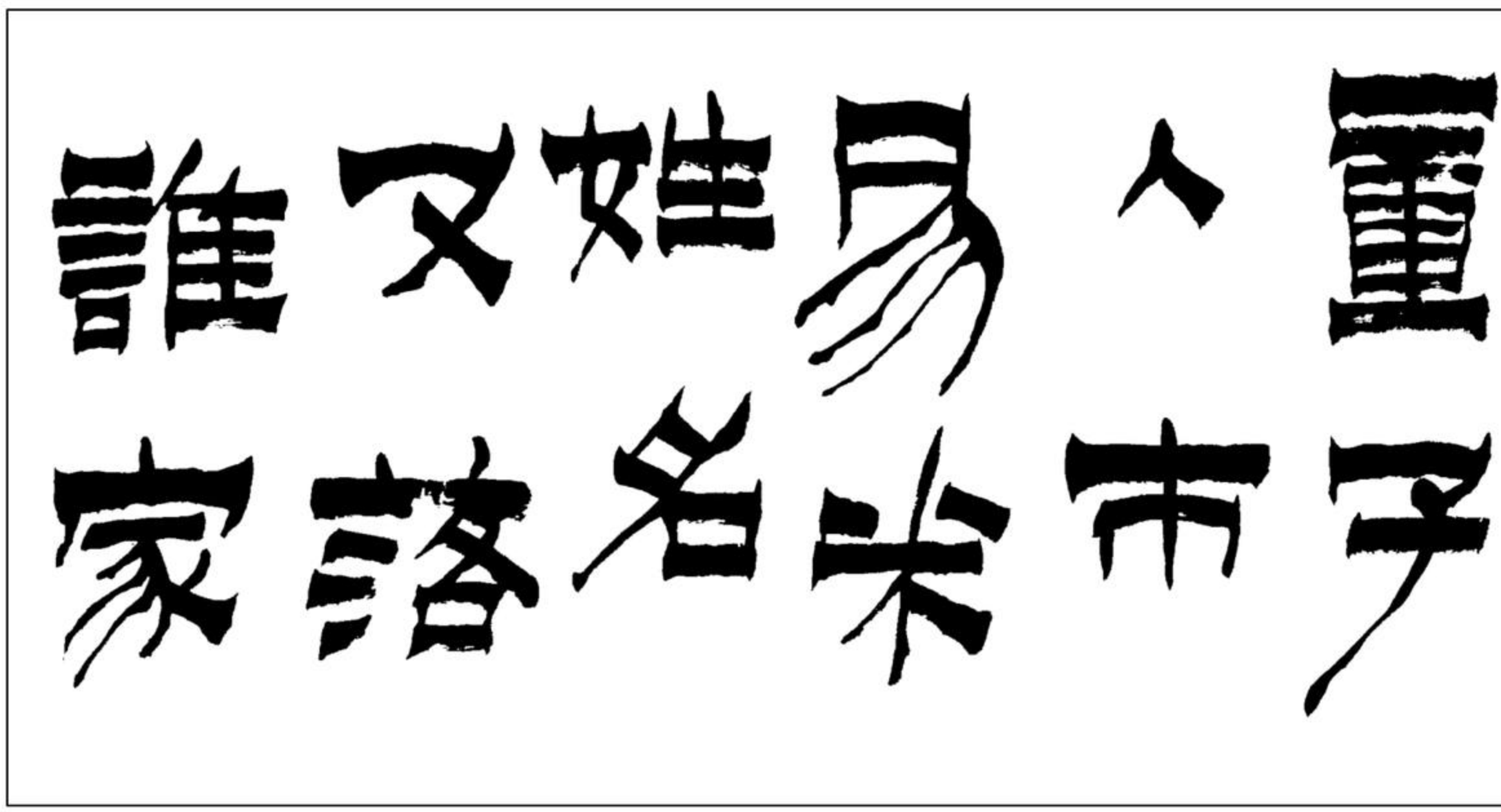


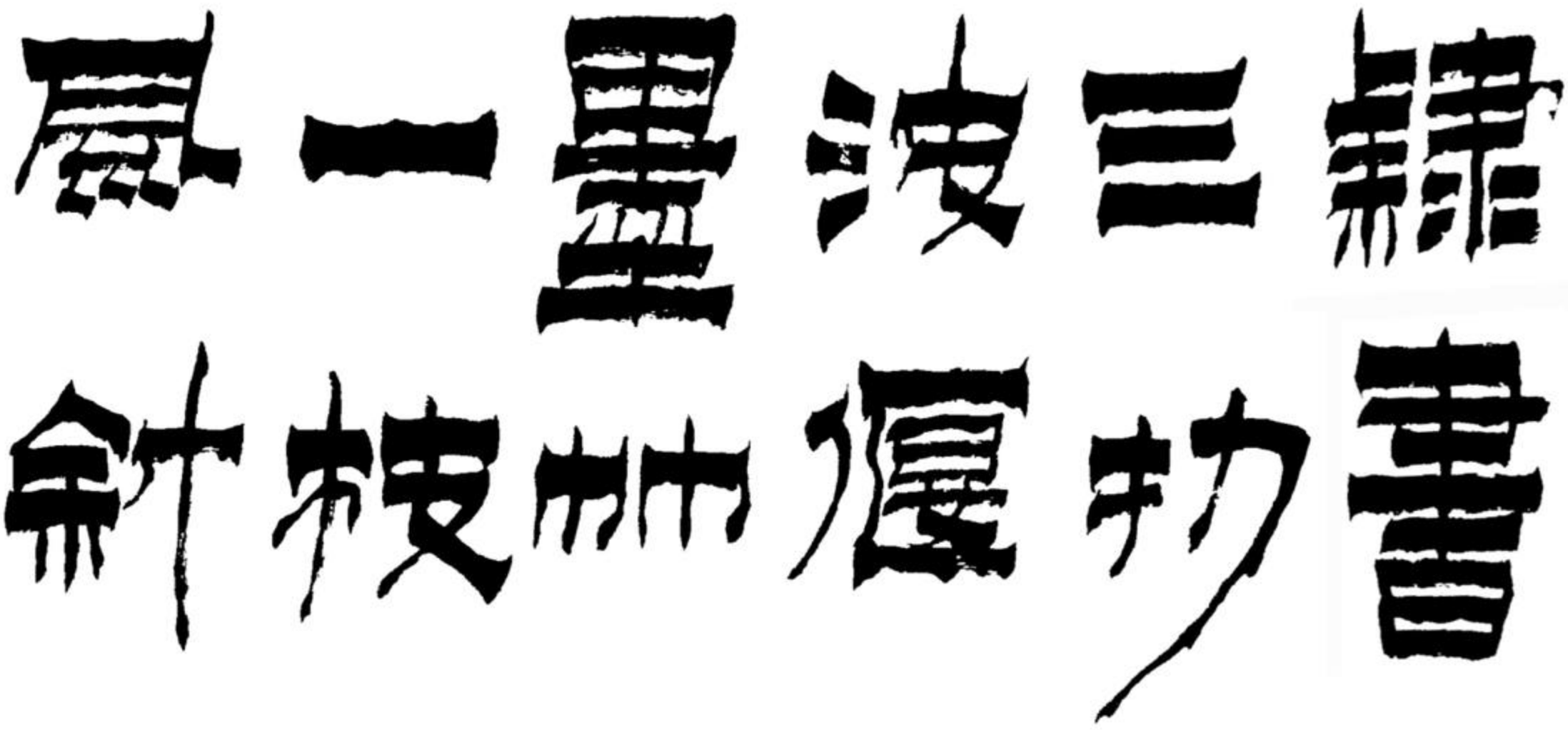
二十七、小野愛実
臨書　行書　文徴明『五言律詩幅』　二尺×八尺
「南樓三月盡、飛絮滿江城。野色烟中斷、斜陽翟外明。繞簷風燕々、千樹煖鶯々。歲有傷春感、兼茲白髪生。」
ずっと憧れていて書いた作品です。半切以外の作品は初めてで背伸びをしてしまったなと思いつつも、とても楽しんで書けました。
感じるかっこよさを少しでも感じてもらえたらうれしいです。未熟な作品ですがご批評お願いします。



二十八、鈴木新人
創作　行草　『獨不見』　二尺×八尺
「前宮路非遠舊苑春將遍玉戸早梅雕梁數歸燕身輕逐舞袖香暖歌扇自知秋風詞長侍昭陽殿誰言後庭人年年獨不見」
はじめての創作です。キレ味のある線、時々出てくる黒い文字を表現しようとしましたが、出来たかどうかは、はなはだ疑問です。線に深みのある三回生になりたいものです…。




重人易姓又誰
家語名未市子



二十九、大泉陽輔

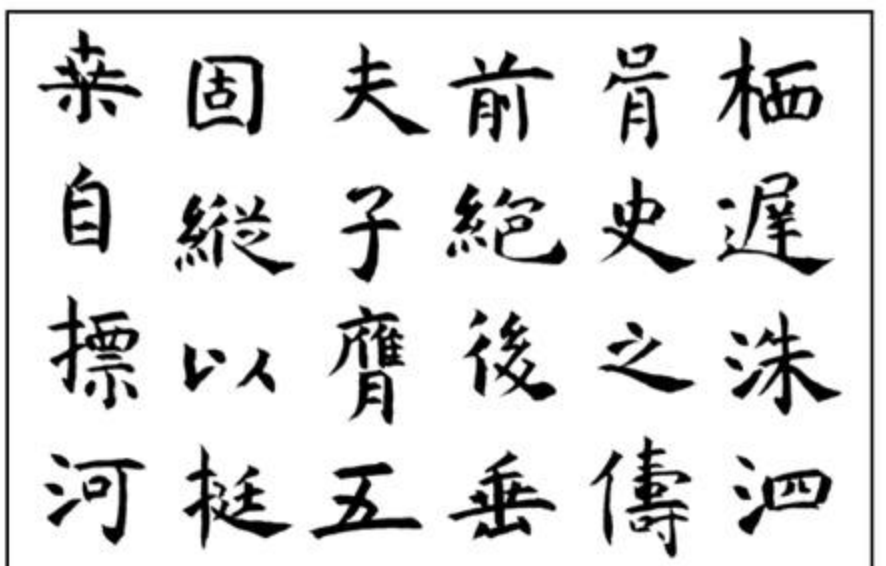
臨書　隸書　金農『隸書六言詩横披』

「隸書三折波偃。墨竹一枝風斜。童子入市易米。姓名又落誰家。」二尺×八尺横

作品のもつ雰囲気を重視して制作しました。

周囲から隔絶された空気感を目指して。

三十、鈴木新人
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　三尺×六尺
「栖遲洙泗不預帝王之録遠跡胥史之儔而徳侔覆載明兼日前絶後垂百王遺風於萬代歟夫子膺五緯之精穠踵千年之聖固縦以挺稟生徳而降靈載空桑自摽河海之状勝克」
三回生という節目の時期に差し掛かり、自分の中での集大成を形に残したく、無謀とも呼べる3×6楷書に挑戦しました。これが自分のすべてです！という作品になっていればいいのですが…



三十一、鈴木貴也
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　二尺×八尺
「來滿路碧烟空散月中徐棹酒船回高賢尋壑共經丘偶得追遊陸羽甘泉春試」
今回は行書の文徴明に立ち戻ってみました。画数の多い漢字の配置と線質を掴むのに四苦八苦しながら書いています。文徴明はもう少し書いてみたいと思います。

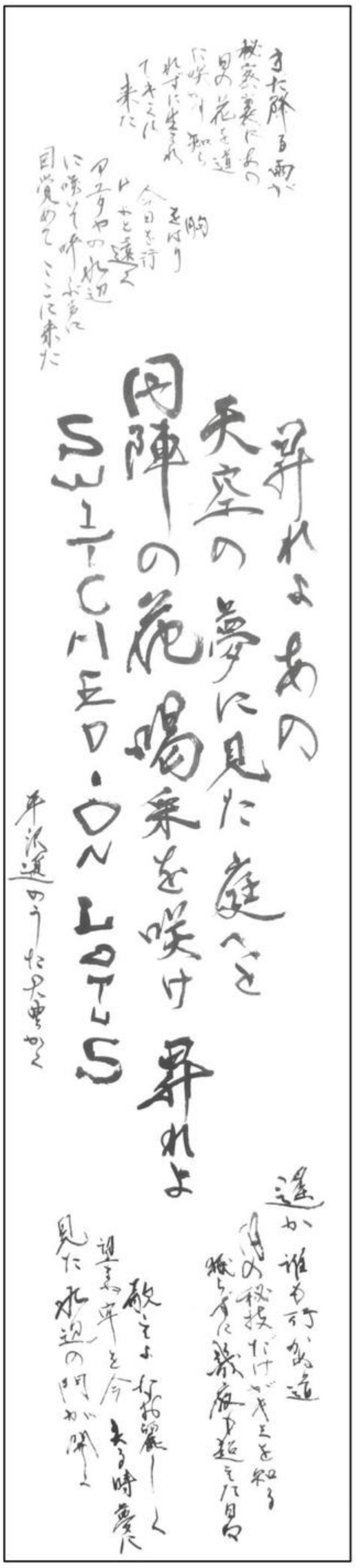


三十二、時藤大典

創作　調和体　『SWITCHED-ON LOTUS』　二尺×八尺

「昇れよ　あの天空の　夢に見た庭へと　円陣の花　喝采を咲け　昇れよ　SWITCHED-ON LOTUS」

平沢進の同名の曲を創作してみました。作品制作上でのテーマは「浄」です。生まれては消える命は儚くも力強く美しい――この曲を初めて聞いたときは思わず昇天しそうになりました。天人のような気持ちになって書きたかったです。

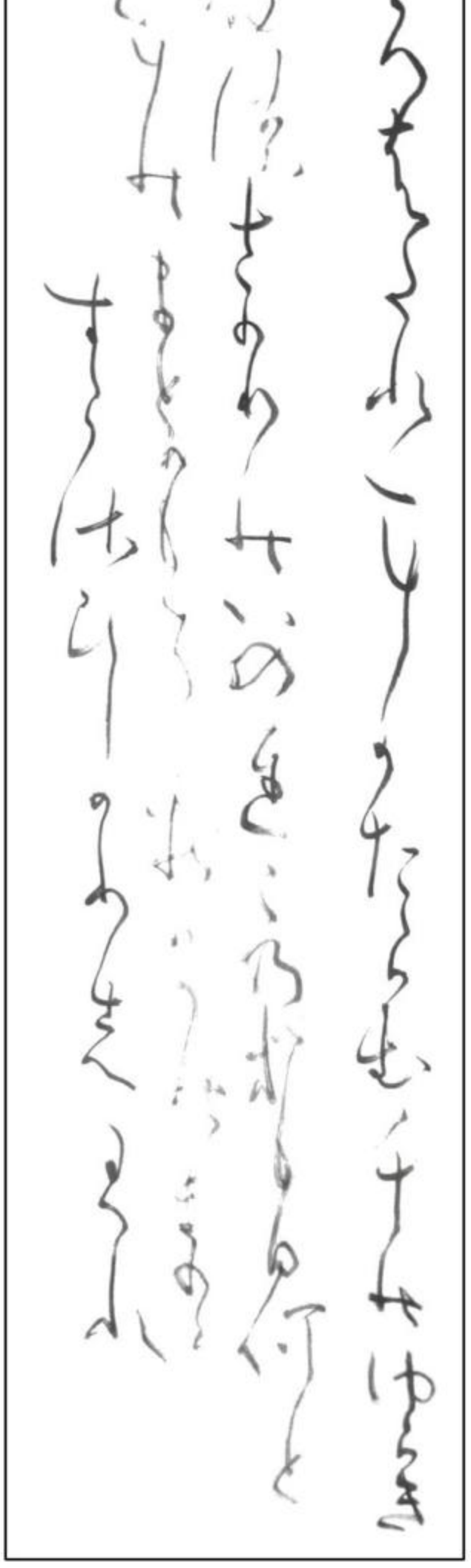


三十三、山口萌

創作　仮名　『臙脂色は』　二尺×八尺

「臙脂色は　誰にかたらむ　血のゆらぎ　春のおもひの　さかりの命　このおもい　何とならむの　まどひもちし　その昨日すら　さびしかりし我」

与謝野晶子の『みだれ髪』から。この歌を初めて読んだとき“情熱の歌人”と言われる女性の純粋さに惚れてしまいました。その言葉の潔さと情熱をどうしても表現してみたくなって、大字仮名に初挑戦しました。大胆な歌を“女手”である仮名で表現することで、芯の強さのある女性らしさが表現できていればと思います。



三十四、山本大翔

臨書　草書　傅山『七言絶句幅　二尺×八尺

「龍王社鼓閙村雩、抛却殘書也杖扶。愁無角抵酬花眼、誰好麈糟俯竈觚。」

傅山の書を臨書しました。傅山には線のうねりやダイナミックさがありますが、これは私が苦手とする筆遣いです。しかし、あえて傅山の書を選びました。苦手と言って逃げているだけでは成長しないと感じたからです。また、人生初の二八作品であり、草書もほぼ初めてということもあり、大変、大変苦労しました。未熟な臨書作品ですが、よろしければ御批評の程お願いします。



三十五、脇本啓太

臨書　隷書　木簡『武威後漢簡』　二尺×八尺

「二年勝甚哀老小高年受王杖上有鳩使百」

肉筆の持つ力強さと生き生きとした雰囲気を、大きな紙面に可能な限り再現できるよう努めました。



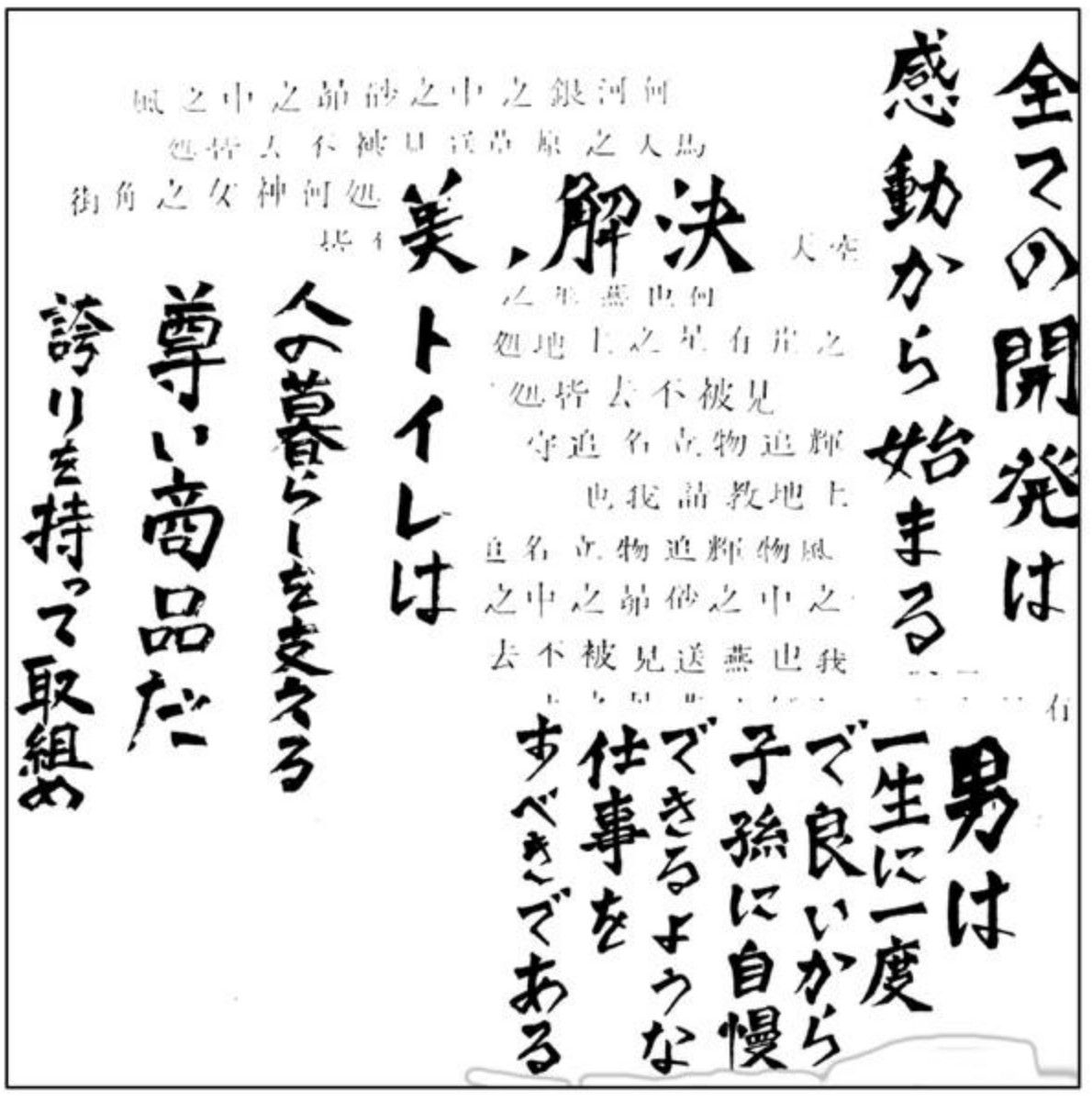
三十六、渡辺健介
創作　篆書　『無我』　一尺×八尺
「我忘吾」
自分を忘れることができるほど熱中できるものは、人生を豊かにしてくれると思います。



三十七、大庭諒介×奥山優×鈴木新人
創作　版書
『プロジェクトＭＡＸ　響け！魂の言葉たち』　五尺×五尺

男たちは、集まった。彫り続けること半月。塵まみれとなる奥山家。手には血が滲み、額には汗が光る。それでも男たちは、彫り進めた。故きを温め、己を知るために。
その時、先人の言葉が目に止まった。
「美しいものを作れ。そうすれば解決する。」

※当トリオは怪しい団体では御座いません。ごゆるりと、作品をご鑑賞ください。



□作品紹介□
―禅居庵―

三十八、浅野彰浩
創作　楷書　千字文『藝獨譽曠』　全紙
千字文から文字を取ってきて羅列し造像記風に書いてみた作品。数ヶ所から何となく取ってきた文字の羅列であって何の意味合いも含ませていないが、いかに重厚・荘厳・豪快さを表現できるかを焦点として趣向を凝らして表現した所に工夫・創作性を見出してもらいたい。

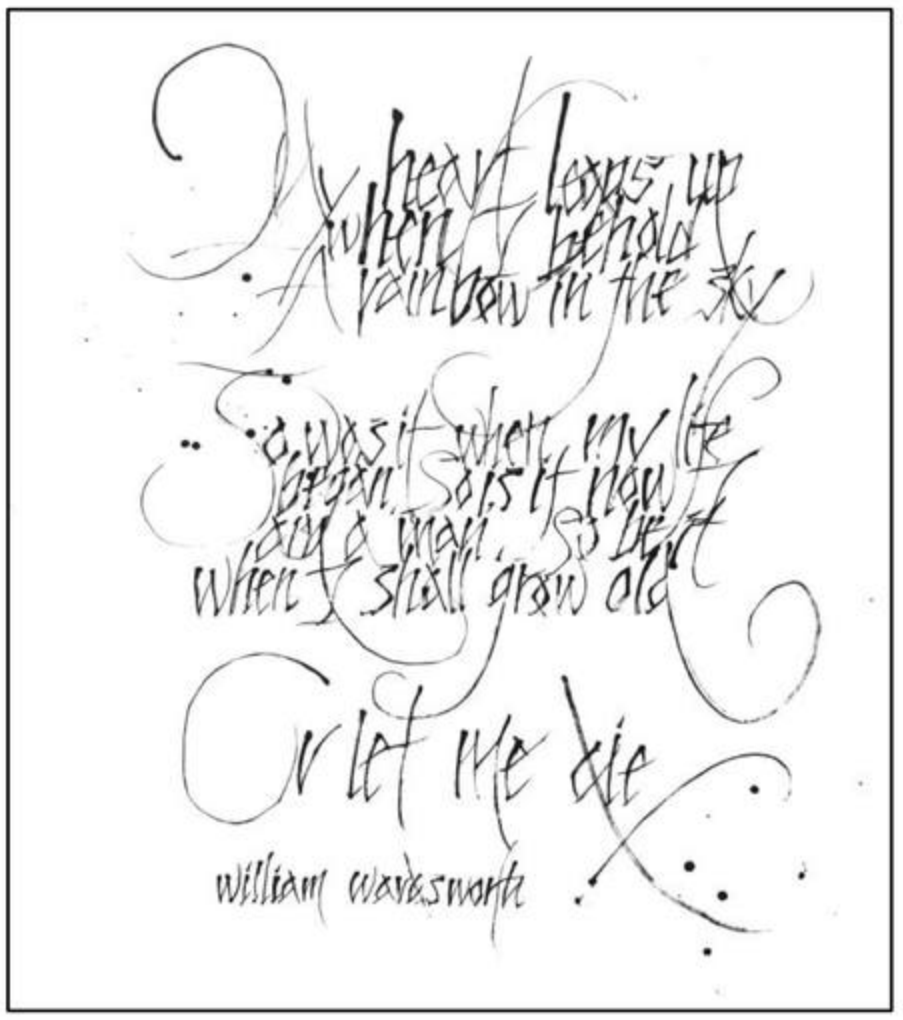


三十九、伊田唯果
臨書　楷書　呉熙載『楷書東方朔画賛四屏』　半切
力強い字に惹かれてこの作品を選びました。雰囲気よく書けるよう自分なりに頑張りました。まだまだ未熟ですが、ご批評お願いします。



四十、大泉陽輔
臨書　隷書　楊峴『隷書七言聯』　全紙
「論詩説剣倶第一。社酒寒燈楽夫央。」
独特の流麗さに惹かれて臨書しました。誰に聞いても書き方さえわからないまま、ただやみくもに挑みましたが、どうしても深みのあるのびやかな線が書けません。その苦しみは楊峴に魅了されるほどに募ってゆきます。とうてい手の届かない「高嶺の花」に遠くから憧れるばかりです。





四十一、大庭諒介

創作　英書　『虹』　1,051×781mm

「My heart leaps up when I behold / A rainbow in the sky. / So was it when my life began, / So is it now I am a man, / SO be it when I shall grow old / Or let me die!」

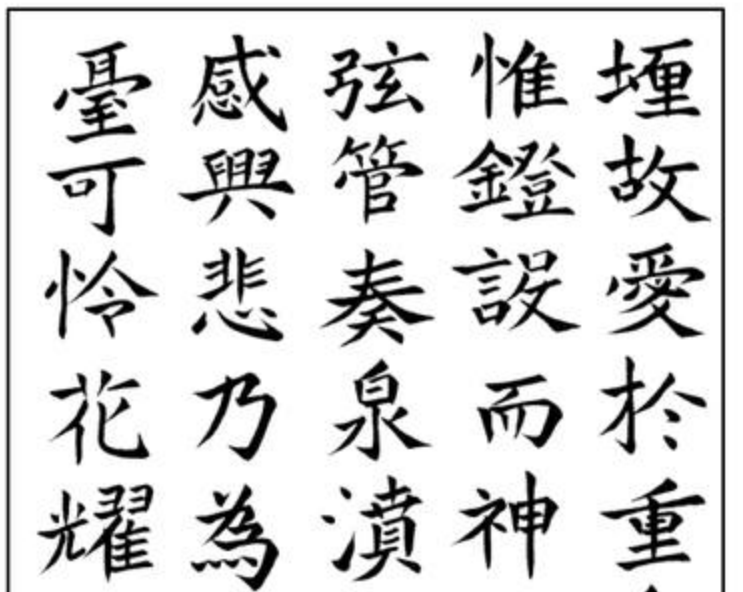
英詩は william wordsworth『虹』より抜粋。詩人が美しく、雄大な自然を目の前にして、自らの死を吐露したことは、彼の自然への思慮深さを物語っているように感じた。残酷に清々しい。この相反する〈像〉を持つ言葉を、紙面に表現した。

四十二、岡田卓也

臨書　楷書　『美人董氏墓誌銘』　全紙

「廔故愛於重泉沈餘嬌於玄※惟鐙設而神見空想文成之術弦管奏泉濆弥念姑舒之魂觸感興悲及為銘日高唐獨絶陽臺可怜花輝芳囿霞」

もう四回生ということもあり、卒業制作へ向けた一応最後の臨書作品です。繊細鋭利な筆画を再現できるよう努めました。

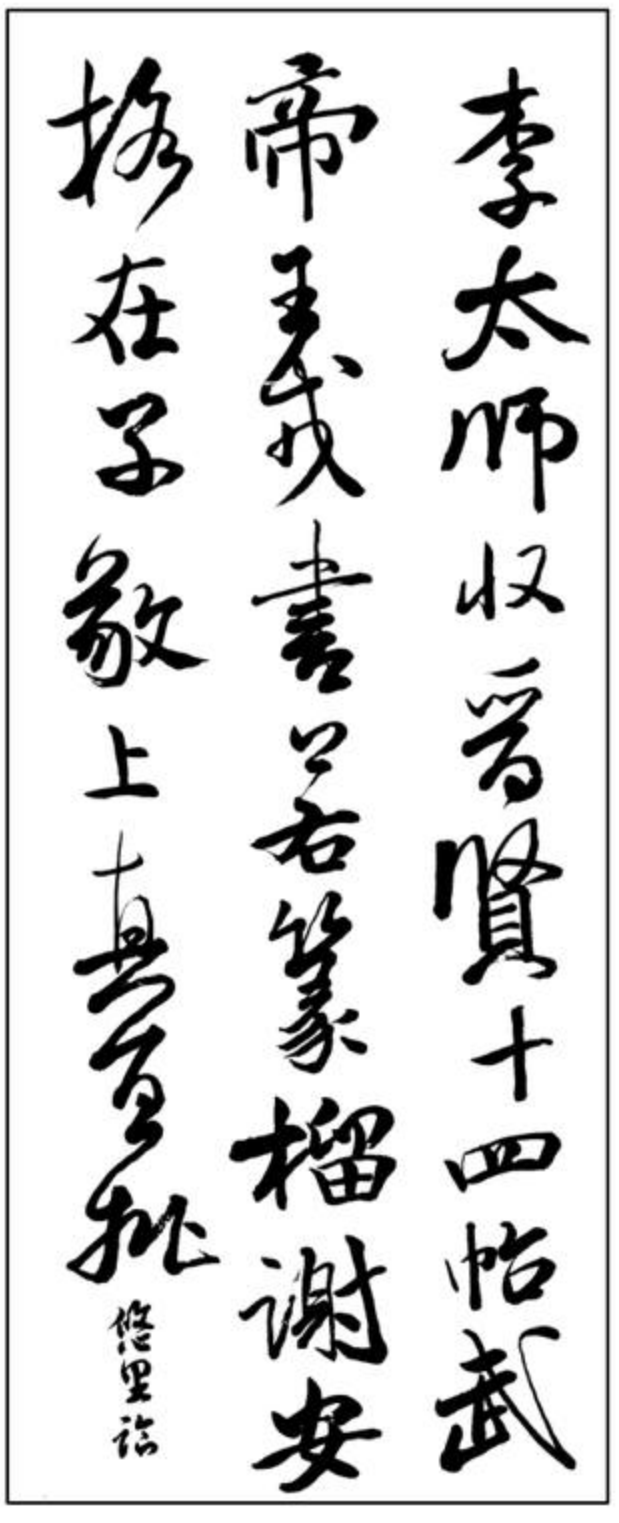


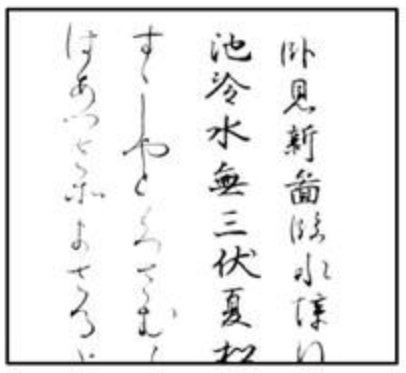
四十三、菊池悠里

臨書　行書　米芾『李太師帖』　連落

「李太師收晉賢十四帖。武帝王戎書若篆榴。謝安格在子敬上。眞宜批」

かっこいい行書を書いてみたいという思いからスタートした作品製作でしたが、原本の持つ堂々として豊潤な魅力を再現するのは難しく、戸惑いも多かったです。未熟な作品ですが、ご批評の程お願いいたします。





四十四、小松聡子
臨書　仮名　藤原行成『粘葉本和漢朗詠集　納涼』
「青苔地上銷残雨…」
端正で凛とした美しさを表現したいと思いながら書きました。漢詩や和歌の中身も素敵で気に入っています。初めての仮名作品、未熟ですがご批評よろしくお願い致します。



四十五、小松聡子
臨書　刻字　鄧石如　『篆書白氏草堂記六屏』
「緑陰蒙々。朱實離々。不知」
秋季書展に引き続き、刻字を制作しました。今度はサイズも大きくして金箔も貼り、レベルアップです！パンフレットには筆で書いた下絵を載せているので、筆と刻字という二つの表現をお楽しみ下さい。

四十六、Zsigo Andras（ジーゴ・アンドラーシュ）
臨書　行書　趙孟頫『玄妙観重修三門記』　半切
「脱扃剖鐍孰發真悟迺崇弥舘迺」
初めての書展で頑張ってみたいと言う思いで、作品を出すことにしました。正直に言うと、意外と苦労しました。良い点、悪い点等ありましたら、ご批評よろしくお願いします。



四十七、柴田翔
臨書　楷書　光明皇后『樂毅論』　半切三聯
「開彌廣之路、以待田單之徒、長容善之風、以申齊士之(志)、使夫忠者遂節、通者義著、昭之東海、属之華裔、我澤如春、下應如草。道光宇宙、賢者託心、鄰國傾慕、四海延頸、思戴燕主。仰望風聲、二城必従、則王業隆矣。雖淹留於兩邑、乃致速於天下。」
凛然と連なる六筋の黒と、その背後に浮かび上がる行間の白。追求したのはずばり、作品を貫く構成美です。字形の忠実な再現に気を取られるあまり、全体像への意識を疎かにしてしまっていた過去の反省から、今回は空間的な構成に主眼を置いて制作にあたりました。また一方で、光明皇后の書特有の、突き刺さるような精悍な筆致も表現できるように努めました。ご批評、ご感想など御座いましたら、是非ともお聞かせ下さい。









四十八、杉本綾香
臨書　行書　蘇軾『橅木詩巻』　半切
「葉籠竹和煙滴露梢暫下飛烏將數子」
この文章の情景や字形が好きな作品です。今回も、それぞれの字の個性を出しつつバランスをとることや、字の鋭さを表現することに苦労しました。未熟な点が多いですが、少しでもこの法帖の良さが伝わる見ごたえのある作品になっていたら嬉しいです。



四十九、鈴木新人
臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』　半切
「墳薄摩蒼穹願將裝御連屏畳率」
点画が充実している董其昌のこの法帖に惹かれ半切にしてみました。しかし、字の持つ“エレガントさ”がなかなか出せず、自分を見つめなおしながら書く作品となりました。



五十、寺田実穂子
臨書　行書　趙孟頫『唐狄梁公碑』　半切
「安東以息江南之饋輸識者韙之北狄再寇趙定間」
今回の課題を「のびのびと書くこと」と決めて制作に取り組みました。とくに運筆に注目したので、法帖から受けた伸びやかなイメージが表現できていたらいいです。ご批評お願いします。



五十一、中川和也
創作　複合書体（行草）『無極』　73×54cm
「無極」
「どっちつかず」という言葉がありますが、それは言い方を変えれば「どちらにもなれる」ということではないでしょうか？棒磁石のS極とN極のちょうど真ん中は、どちらの極でもありませんが、棒磁石を真二つにしたとたん、真ん中だった部分はS極にもN極にもなります。“極で無い”（どちらでもない・何でもない）ことが、同時に“いろいろな可能性を持つ”ということなのだと思います。

五十二、橋詰奈央
臨書　かな　『高野切第一種』　半切
「古今和歌集巻第一　春歌上　ふるとしにはるたちける日よめる　ありはらのもとかた(以下略)」
優美で格調高い線質を自分のものにしたいという思いで臨書しました。ご批評よろしくお願いします。



五十三、中田真規
臨書　仮名　本阿弥光悦『四季草花下繪古今集和歌巻』　16 ㎝×30 ㎝
「霞にまがふみねのしら雲」
水墨画の草花の茎のような「し」。濃淡のぼかしのような漢字と仮名文字の強弱のコントラスト。世界の言語の中でも特に意匠的と言われる日本語ですが、その中でも本阿弥光悦の作品は「絵のような書」、私の作品も臨画のような臨書だと思いました。秋季こそは巻子に挑戦したいです。



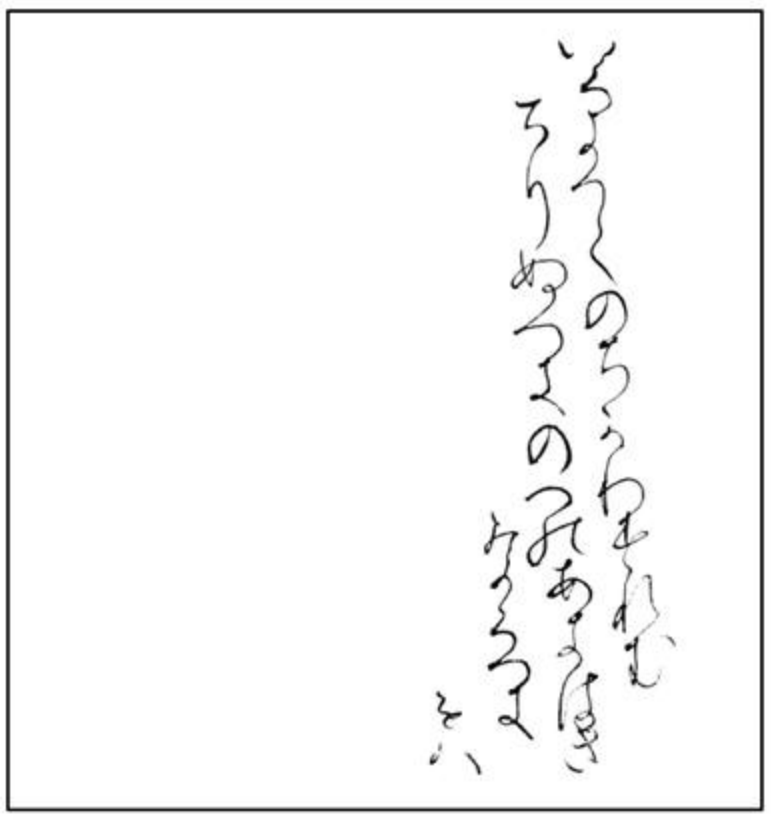
五十四、森美幸
臨書　行書　王羲之『平安帖』　半切
「此粗平安脩載末十餘日談人近集存　」
まとまった時間の取れない中、なんとか書きました。完成品にはほど遠いですが、楽しく書けただけよしとしたい、そんな作品です。



五十五、山口萌
創作　草書　『峨眉山月歌』　連落
「峨眉山半輪秋　影入羌江水流　夜発清渓向三峡　思君不見不渝州」
李白の有名な詩を題材にしました。この詩のこの詩の光景が好きです。「自分の字」は臨書の上に成り立っているなあとつくづく感じました。これから様々な書に親しみ自分の字がどのように変化していくかを楽しんでいきたいと思います。



五十六、吉田梨沙
臨書　仮名　伝藤原行成『升色紙』　半切 1/2
「いくよへてのちかわすれむちりぬべき・・・」
大胆な構成による余白の美。パンフレット掲載のこの一首がお気に入りです。



五十七、渡辺健介
臨書　行草　趙孟頫『天冠山詩』　半切
「茲嶺可逍遙下可坐百人豈徒木石居真與猿鶴隣」
作者がゆったりと嶺を散策するというのどかな詩です。今回の作品は趙孟頫がどのように書いていたのか想像しながら臨書しました。また、ただ「写す」だけでなく、「自分の作品にする」ことを意識しました。作品に色々な思いを詰め込み過ぎたため、中途半端な作品になってしまった気がします。



五十八、脇本啓太
創作　調和体　『走る』　全紙横
「走る　もっと速く　もっと遠くへ」
肉体的にも精神的にも苦しい時の、諦めそうになる自分を鼓舞するために書きました。



五十九
大泉陽輔×菊池悠里×小松聡子×多門千早×寺田実穂子×橋詰奈央×檜山葵×藤井結稀×吉田梨沙×渡辺健介
創作　篆刻　「刻十二支」　半切 1/4
「子丑寅卯辰未午未申酉戌亥」



二回生の有志(通称：篆研)で、十二支の印を彫りました。人数が多いため、意見をまとめるのに苦労しましたが、一人一人の個性が出て、楽しいものにできたと思います。実際の印も展示しておりますので、そちらも合わせてお楽しみ下さい。

□作品紹介□
―小作品―

六十、東佳央里×小野愛実
創作　篆刻　『明月時至　清風自来』　色紙
「明月時至　清風自来」



(東)白文の印と文字を担当しました。印は字の配置を工夫しました。印の合作というのは初めての試みで手さぐりではありましたが、何とか形になったのではないかと思います。
(小野)朱文の方を彫りました。合作も印の作品も初めてでしたが、試行錯誤しつつも楽しくつくることができました。夏らしさを感じていただければうれしいです。

六十一、大庭諒介
創作　『灯』　行燈
「花鳥風月」

とても個人的な話ですが、私の家には電気がありません。ここで詳しく述べると、途轍もない困難が伴いますので、作品横写真をご高覧下さい。花鳥風月、光となって、どうか私を導いてくれますように。



六十二、尾﨑由布子
創作　隷書　『雑草魂』　半切 1/4
「雑草魂」

せっかくなので、研究室にちなんだ言葉を選んでみました。十年前に流行したらしいこの言葉の意味はねばり強さ、地道な努力、ど根性など諸説あるようですが、私はぜひ雑草に対する情熱という意味を加えたいと思います。私たちの一番身近で生きる彼らの魅力を知り、伝えていけたらという意気込みを込めたつもりで…。

六十三、木谷亮太
創作　行書／金文　『誰が為の幸いか』　半紙2枚
「誰為幸」
　幸せとは一体誰のためのものか。何のためにそれを求めるのか。人は、己の心と正面から向き合い時には目を伏せたくなるような醜さをやさしく内包しながら、成長してゆく。どうかその中でほんの1㎎でもいいから、人を思い遣る心を大切に思ってほしい。そんな様を軽いノリで表しました。





六十四、佐藤綾美
創作　隷書　『時空』　色紙
「時空」
　時間や空間を超えられたら、と考えずにはいられない大学三回の初夏。初めての隷書は想像以上に難しく、拙さのにじむ作品ではありますが、昨今の宇宙ブームに乗っかってコスモな感じが出ていれば幸いです。



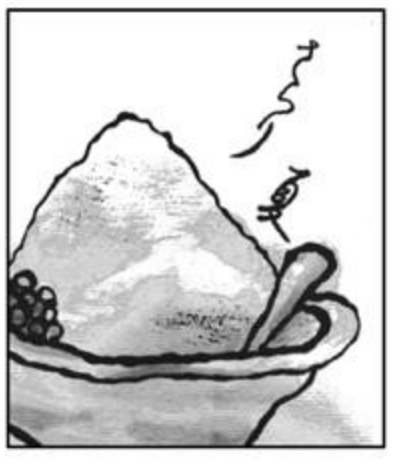
六十五、杉本綾香

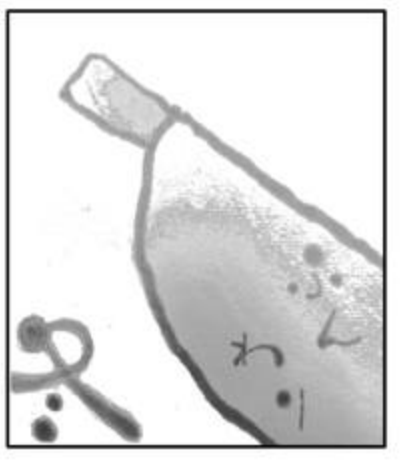
創作　『四季折々』　色紙４枚

季節ごとの和菓子と形容詞をそれぞれ色紙にまとめてみました。ほんのり、さらりと香る四季折々の味、はんなり、ふんわりと感じる四季折々の情緒を楽しんでいただけたらと思います。私はどの季節も好きです♪









六十六、檜山葵

創作　かな　『百人一首』　色紙

「夜をこめて/とりのそらねははか/るとも/よに逢坂の/せきはゆるさじ」

前からあこがれていたかなに初挑戦しました。しなやかな筆運びを心がけましたが、大変難しかったです。ご批評よろしくお願いします。



六十七、松村貴史

創作　行書　『初夏清風』　半切 1/3

もう三回目の初夏書展を迎える年になってしまいました。この時期の太陽の光がとても好きです。今年の夏は涼しかったらいいなあ。



六十八、水谷慈
創作　隷書　『喝』　色紙
「妙言無古今」
真理は不変のもの、という意味です。昨年から研究室に配属され、研究していく中で、百年経っても残るような成果を挙げることができたら幸せだなぁと思い、自分への喝を込めて書きました。



六十九、山口萌
創作　調和体　『ぐぅぅっと』　ブック
本を読んでいて、映画を見ていて、音楽を聴いて自分の心に〝ぐぅぅっ〟と食い込んだ言葉たちを集めてみました。

七十、山本大翔
創作　調和体　『don't cry anymore』　色紙
「くじけそう」「何を信じたらいいか分からない」・・・誰もが一度はこのような思いを抱くはず。でも、そのようなとき「ギリギリだって、一人きりだって、負けたくない、冗談じゃない」・・・こういう気持ちを持ち続けていれば泣かずにすむ、いつか笑える・・・「I don't cry anymore、強くならなきゃ」。これはこの曲に込められた思いの一つ。込められた思い全ては書だけでは伝えられない。これを機にシンガーソングライターmiwaに興味を持っていただければ幸いだ。



□合作紹介□

合作『天の川』

七夕も近づいてきました。「自分を象徴する言葉」をテーマに、「天の川」をコンセプトに、部員の各人の個性をキラキラ光る星々に見立て、屏風に表してみました。個性豊かな星々が、京大書道部という美しい天の川になるのです。

三回生合作『CDジャケット』

私たち三回生は、噛めば噛むほど味が出るスルメのような回生です。今回、幹部回生の最後の書展ということで、私たちの〝味〟を表現すべく、自分たちの好きな曲を選び、それをイメージしたジャケットを作成しました。ユニークなCDショップに来たような気分で楽しんで下さい。

一回生合作『夏休みの目標』

『夏休みの目標』と言う題材で今年入部した部員に作ってもらいました。たかが豆色紙、されど豆色紙だと感じました。こんなちっさくても個性がにじみ出てると思いませんか？



This book was
made by the LeME